

資料紹介

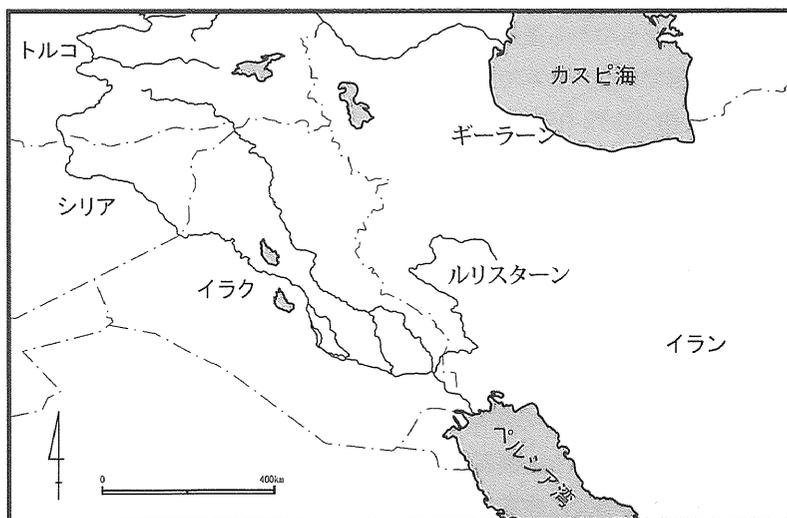
筑波大学保管 東南アジア、西アジアの青銅製品について

荒 友里子

I. はじめに

本稿で紹介する資料は、現在筑波大学に保管されている国外から将来された青銅製品7点である。今回紹介するにあたり、便宜上資料には①～⑦の通し番号を付けた。これらの資料はすべてイランにおいて収集された遺物であると考えられていた。しかし調べていくと、斧類の中でソケットを有する袋穂式のもの、東南アジアの初期青銅器時代に属する型式であることが判明した¹⁾。該当するのは資料②、③、④である。

一方、資料①、⑤、⑥、⑦は、イラン、ないしその近隣で発見されたものと考えて良いだろう。今日世界中で収蔵・展示されている古代イランの青銅器の多くが、ルリスターンやギーラーン地方など、西イランで出土したとされるものである(第1図)。イランでは、1920年代から偶発的に発見された、もしくは盗掘された遺物が美術品として市場に出回り始めた。各国の博物館や美術館はそれらの収集に努めたが、それらの来歴を「伝イラン出土」としか示すことができないため、考古学的な研究をする上で大きな弊害となっている。考古学的な調査が行われる



第1図 北西イランの地域区分(足立 2004: 図1を改変)

一方でこうした来歴のものは後をたたない(紺谷ほか 2002)。本稿で紹介する資料も出土地などが不明であり、東南アジアの資料に関しても同じような状況である。したがって、これらの資料を考古学的な研究に活用する場合、今までに行われてきた型式学的研究の中に当てはめて、考察を加えるのが限度であろう。

II. 資料の紹介

今回分析した青銅製品は、斧類 4 点、剣類 2 点、その他 1 点の計 7 点である(第 2 図)。このほかにもう 1 点、袋穂式の槍先と見られる製品があるが、損傷が激しく、実測や観察に耐えうる状態ではないと判断し、紹介を断念した。この槍先以外は、錆も安定しており、保存状態は良好と言えよう。

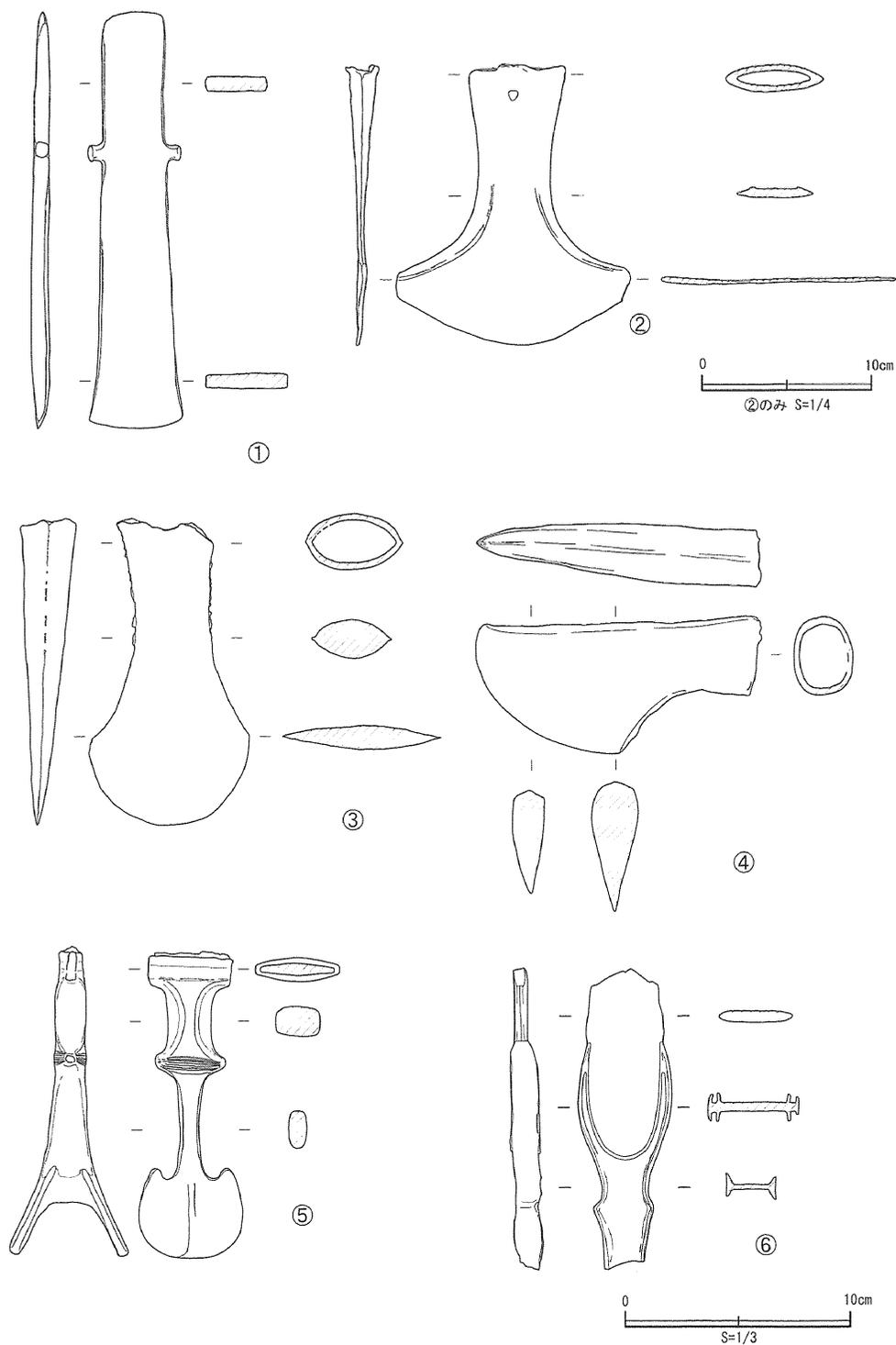
以下、先行研究の成果と合わせて、斧類、剣類、その他の順に各資料の説明をしていきたい。

1. 斧類

はじめに述べたとおり、資料①を除いた斧類は東南アジアのものと考えられる。東南アジアで青銅器が出現するのは前 2 千年紀末と比較的遅く、その中心はベトナム北部、タイ東北部である。特に中国雲南省地方の影響を大きく受けながら、独自の発展を遂げたとみられている(坂井ほか 1998)。前 1 千年紀後半頃には製鉄が始まり、同時に青銅器の生産に関しても最も豊富で華麗な時期となる。この地域では、袋穂式のものが初期青銅器時代から存在しており、ある程度発展を遂げた段階の金属器技術が導入されたことがわかる。しかし、当地域の青銅斧に関しては詳しい情報が公表されているとは言えず、どの地域の、どの段階の資料であるかを特定することは困難である。

一方、西アジアの斧に関しては、1930 年代から研究が始められ、1960 年のデイエ(Deshayes)による総括的な集成はその後の斧の研究に大きな影響を与えた(Deshayes 1960)。特に古代イランの斧は、シンプルなものから豪華な装飾が施されたものまで実に様々な形態を持ち、また刃や柄の付き方も多様である。日本でも足立拓朗氏により柄孔付斧の分類と編年案が示されている(足立 2004)。当初、古代イランの斧を代表する前 1 千年紀前半のルリスターン地方の資料の中に類例を求めたが、該当するものは見つけられなかった。そこで、西アジアからヨーロッパまでの斧を広範に扱ったデイエの集成を中心に、コーカサス、アナトリアなどの出土資料も参考に検討を行った。

資料① 長さ 182mm, 茎端幅 26mm, 刃部幅 41mm。^{なかご}茎式の縦斧である。ずしりと重量感があり、今回紹介する金属器類の中では最も保存状態が良い。全体的に直線的で、両側面には突起が付いている。より大型で側面が若干くびれた型式を祖型とし、トルコのテル・ジュダイダ(Tell Judeidah)出土で前 3 千年紀初めから中頃に位置付けられたものが今のところ最も古い例のようである(Рысин 2008)。このように側面がくびれたものも類例とするならば、西アジア、コーカサス、ウラル地域に至るまで、非常に広い地域に長い期間存在する。デイエ集成を見てみると、本資料のように明確な突起が付き、細身で直線的なタイプは、特にコーカサス・ウラル地



第2図 筑波大学保管資料-1 (筆者実測)

域に多いようである。

資料② 長さ 161mm, 差し込み口は長径 44mm; 短径 19mm; 厚さ 4mm, 刃部幅 132mm。袋穂式の斧である。中に土などが詰まっているため、どこまで中空であるのかはわからない。片面の上部には径 6mm ほどの孔があいている。柄を釘などで固定するための孔と考えられるが、もう一方の面には孔があいていた痕跡は認められない。孔のあいた面には両側面に沿う形で稜線が認められる。刃が扇状になった斧は東南アジアの青銅斧によくみられ、当資料はその系譜を引くものと考えられるが、刃部は丸みを帯びた三角形に近い形をしており、両端が少し角ばっている。このような特徴を持つ斧は特にタイ東北部などで見られる²⁾。

また、一般的な青銅製品と違い、紫がかった色をしているのも特徴の一つである³⁾。

資料③ 長さ 133mm, 差し込み口は長径 37mm; 短径 19mm; 厚さ 3.5mm, 刃部幅 71mm。袋穂式の斧である。資料②と同様、どこまで中空であるかはわからない。一見すると左右対称のようにも見えるが、側面の反り方が若干異なっている。両側面には鑄造の際に生じたと考えられる鑄ばりが残っており、磨きによる仕上げを省略していたことがわかる。資料②にもあてはまるが、これらの斧は 2 枚合わせの鑄型を用いて鑄造されたと考えられ、実際砂岩や粘土で作った鑄型も発見されている(坂井ほか 1998)。

資料④ 長さ 126mm, 差し込み口は長径 28mm; 短径 22mm; 厚さ 2.0-3.5mm, 刃部幅 83mm。資料②・③と同様袋穂式であるが、両者と違って刃が斜めに付いている。当資料もどこまで中空であるかはわからない。背は稜がはっきりとしており、刃先側にいくにつれて角ばっている。東南アジアを代表する金属器文化であり、ベトナム初期金属時代最後の文化であるドンソン文化、もしくはそれに先行するドンダウ、ゴームン文化にみられるものに近いが、より類似した例として、タイ東北部のものが挙げられる。

2. 剣類

資料⑤ 長さ 134mm, 刃部幅 33mm, 刃部厚さ 5.5mm。この資料に名称を付けるならば、鉄芯入り扇状青銅柄頭鉄剣となるであろう。年代に関しては、詳しくは後述するが前 2 千年紀末から前 1 千年紀前半と考えられる。

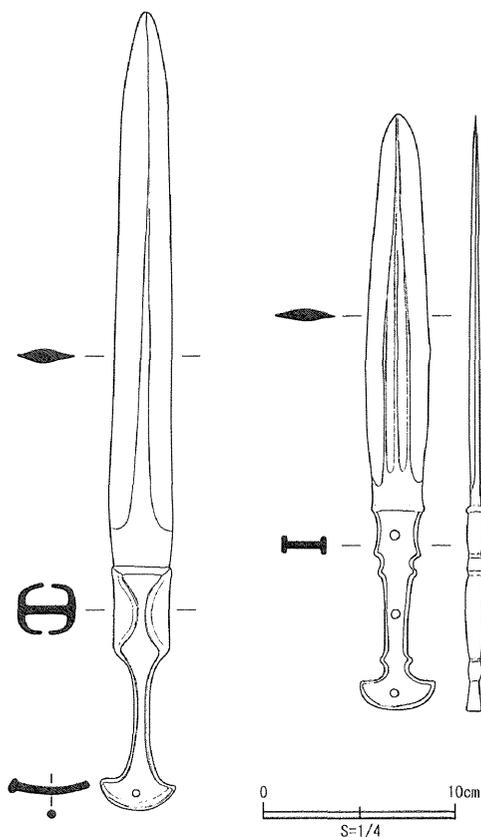
この剣については、注目すべき重要な点が非常に多い。まず柄頭の型式に関してだが、扇状の突起を持ち、側面から見ると鞍のように見える。また、柄に認められる対向する 2 本の弧状突線からなる装飾は、この型式の前段階で使用されたラペットと呼ばれる留め金具の痕跡器官であると考えられる⁴⁾(第 3 図左)。この二つの要素を持った青銅剣の例としては、中近東文化センター所蔵資料などが挙げられる(足立 2006 : p. 35; Fig. 101)。

しかし、当資料が型的類例と大きく異なる点は、その材質である。柄が青銅製で刃は鉄製、というようにバイメタル技術が用いられている上、柄内部にも鉄芯が入っている。刃はちょうど根元で折れており、断面を見ると青銅製の柄の中に鉄刃が綺麗に入っていることがよくわかる。どこまで鉄刃が入っているのか興味深いところだが、今回の分析では明らかにすることはできなかった。

バイメタル技術に関しては、北西イランから南西イランにかけての山岳地帯全域にみられるものの、極めて手間がかかったと想定される鉄芯を入れる技術は、前1000年前後のカスピ海南西岸周辺(アゼルバイジャン州・ギーラーン州)に限定される(紺谷ほか2002)。当資料以外にも、日本に将来されたイラン出土の製品の中にこのような鉄芯入りの剣が知られており、岡山オリエンタ美術館、中近東文化センター、広島大学などに所蔵されている。これらの柄の形態を見てみると、装飾や柄頭の形は多様であり、特定の型式のものだけに鉄芯を入れたというわけではなさそうである。なお、耳形柄頭を持つ例に関しては非常に高い割合で鉄芯が入っていることが指摘されている(Adachi 2002a・2002b)。しかしながら、扇状柄頭で鉄芯入りのものは今のところ確認されておらず、また、鉄芯入りの剣はいずれも刃は鉄製であることから、当資料のように刃が鉄製であることは注目に値する。

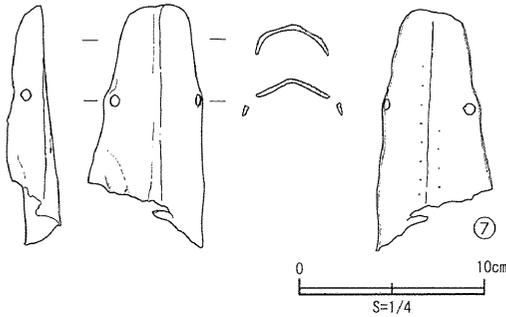
扇状柄頭を持つ青銅剣は、前750年頃に位置付けられ、ルリスターン地方に分布するようである。一方、鉄芯入りの青銅剣は、前述したように前1000年前後とされ、カスピ海西岸周辺で集中的に見つかっている。したがって、これまでに考えられてきた年代と分布に当てはめると、時間的にも空間的にもかみ合わない要素同士が当資料の中で混在していることになる。ルリスターン地方の剣の中にも鉄芯入りのものが存在していたのか、カスピ海西岸周辺の前1000年前後に早くもラペットが痕跡器官化した型式が現れたのか、可能性はいくつか考えられる。「鉄芯入りかつ鉄刃」という希少なパターンであることも含め、当資料が青銅器時代から鉄器時代へ移行する時期の冶金技術を解明する上で重要な資料であることは間違いないが、残念ながら、発掘資料ではないためこれ以上考察を加えることはできない。今後の発掘調査によって類例が出てくることを期待したい。

資料⑥ 長さ131mm、刃部幅33mm、刃部厚さ5.5mm。青銅剣の、柄から刃にかけての部分である。柄には、U字状の溝と茎部にかけての窪みが形成されており、本来木や角など有機質の部品をこの溝部分にはめ込んでいたのだろう。当資料と関係が深いと考えられるものとして「突縁付き短剣」(flanged dagger)が挙げられる(第3図右)。前2千年紀第2四半期に現れ、鉄器時代の西アジアにおいて広く見られる型式である。ルリスターン地方のプシット-Iクー



第3図

ラペットの使用例(左)と flanged dagger (右)
(Overlaet 2003 : Fig. 119 を改変)



第4図 筑波大学保管資料-2 (筆者実測)

(Pusht-I Kuh)遺跡から53本出土していることなどからも(Overlaet 2003), かなり一般的な剣だったと思われる。なお, 資料⑤で触れた, 留め金具が付く剣は, この種の剣の一型式である。

しかしながら, 当資料のように刃部との接合部分にU字形の溝を有する類例は確認できなかった。このU字部分の断面を見ると, 溝の開口部がやや狭くなっているのが

わかる。これははめ込んだ部品を取れにくくする工夫であったと考えられる。その証拠に, 上記の突縁付き短剣は, 部品を固定するための目釘孔を持つのが一般的だが, 少なくとも当資料の残存部分にはそうした孔は見られない。欠損した先端部分にあった可能性はあるものの, それに代わってU字溝が大きな役割を果たしたと考えることができる。

3. その他

資料⑦ 最大長 64.5mm, 最大幅 31mm。^{こじり}鑑と^{こじり}考えられるが, はっきりとした用途はわからない。鑑とは, 剣の鞘の末端に付けられる装飾のことである。非常に薄く, 多少歪んでいるもののほぼ線対象であり, 左右には目釘孔かと思われる直径 3mm ほどの孔があいている。裏面を見ると中心線に沿って 0.5mm ほどの凸点が列を成している。これらは等間隔で並んでいるが, 左右の位置はずれている。表面にも一部うっすらと見えるが, 汚れによって潰れてしまっている。

III. 結語

以上, 7点の資料について観察所見を述べ, 考察を加えた。東南アジア系の斧3点に関しては前2千年紀末から前1千年紀末にかけての資料である可能性が高いが, 特にタイ東北部における青銅斧の編年研究はほとんどなされていないようで, 詳細な地域・年代を明らかにするのは現段階では難しい。

剣類に関して言えば, 一つは近年注目が集まっている鉄芯入りの青銅柄であり, かつ刃は鉄という極めて珍しい例で, もう一つもU字溝という類をみない特徴を持つものである。これらの資料と今回の考察が, 青銅器文化研究, 及び金属加工技術研究の進展に少しでも役に立てば幸いである。

謝辞

本稿で扱った資料に関して, 次の方々から多くのご教示・情報を賜りました。

足立拓朗, 石井彩子, 川畑隼人, 高浜秀, 津本英利, 畠山禎, 雪嶋宏一(五十音順, 敬称略)。また, 筑波大学先史学・考古学研究室の方々には日頃から多くのご指導を賜っています。特に本稿の執筆にあたっ

では、指導教官である三宅裕先生にご配慮いただきました。谷口陽子先生には資料の状態や保存方法に関してご指導いただき、図版の作成にあたっては増森海笑ダモンテ氏のご協力を得ました。

末筆ながら、記して深謝申し上げます。

註

- 1)当初、イラン、ないしその周辺の西アジア地域に限って類例を調べていたが、金沢大学の高浜秀先生、オリエント博物館の津本英利氏に東南アジアの斧である可能性が高いとご教示いただいた。
- 2)参考文献中のP.チャロエンワサ 1981『パンチェン 倭人のルーツ』に非常に良く似た斧が掲載されているが、この文献は、現在では否定されている年代観を基に記述しているため注意が必要である。
- 3)谷口陽子先生から、銅合金の色調は、錫、ヒ素、金等の含有量によって変化するため、本資料は、他の青銅製品とは成分比が異なる可能性があるとの指摘を受けた。
- 4)中近東文化センターの足立拓朗氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

- Adachi, T. 2002a Bronze swords from Luristan and bronze swords with iron core ("ear" shaped Pommel swords). In R. Kontani et al. (eds.) *Treasure from Ancient Iran: Metalworking Culture in the Mountains*. Okayama Orient Museum, pp. 98-101.
- Adachi, T. 2002b The development of the "ear" Pommel swords in northwestern Iran. *Bulletin of the Okayama Orient Museum*. 19, pp. 1-13.
- Boehmer, R. M. 1979 *Die Kleinfunde aus der Unterstadt von Boğazköy : Grabungskampagnen 1970-1978*. Berlin, Gebr. Mann.
- Deshayes, J. 1960 *Les outils de bronze, de l'Indus au Danube*. Paris, Librairie orientaliste paul geuthner.
- Moorey, P. R. S. 1971 *Catalogue of the Ancient Persian Bronzes in the Ashmolean Museum*. Oxford, the Clarendon Press.
- Muscarella, O. W. 1988 *Bronze and Iron: Ancient Near Eastern Artifacts in the Metropolitan Museum of Art*. New York, the Metropolitan Museum of Art.
- Overlaet, B. 2003 *Luristan Excavation Documents: The Early Iron Age In The Push-i Kuh, Luristan*. Acta Iranica. Leiden, Peeters.
- Рысин, М. Ъ. 2008 *Успенский этап кавказской металлообработки среднего бронзового века*. Археологические вести 15. Москва, Наука.
- 足立拓朗 2003 「北西イランにおける耳形柄頭長剣の発達」『青山考古』第20号 85-98頁。
- 足立拓朗 2004 「古代イラン青銅製柄孔付斧の編年案」『西アジア考古学』第5号 25-36頁。
- 足立拓朗編 2006 『展示図録 古代ユーラシアの青銅器』中近東文化センター附属博物館。
- 紺谷亮一 2001 「古代イランの青銅剣再考 —岡山市立オリエント美術館所蔵・バイメタル剣—」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第18号 21-30頁。
- 紺谷亮一・足立拓朗・大津忠彦編 2002 『古代イラン秘宝展 —山岳に華開いた金属器文化—』岡山市立オリエント美術館。
- 坂井 隆・西村正雄・新田栄治 1998 『東南アジアの考古学』同成社。
- 佐原 真 1994 『斧の文化史』UP 考古学選書6 東京大学出版会。
- 津本英利 2002 「西アジアにおける長剣の系譜」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第19号 1-23頁。

- 津本英利 2009 「ウラルトゥの長剣について ―その系譜, 分布と政治的背景―」『オリエント』第52巻
第1号 119-137頁.
- P. チャロエンワサ著・鹿島 昇訳著 1981 『バンチェン 倭人のルーツ』新国民社.
- 増田精一 1968 「天理参考館所蔵資料を中心にみたイラン出土銅剣の一側面」『朝鮮学報』第49
頁.
- レ・スアン・ジェイム著 五味政信訳 1975 「ベトナムの初期金属時代」大林太良編『東アジアの古代文化』
別冊'75 大和書房.
- 山形真理子・三浦由紀子・石井綾子・深津絵実梨・郷 英毅 2009 「東南アジア」持田大輔編『早稲田考
古学 その足跡と展望』早稲田大学曾津八一記念博物館.